目　次

はしがき　3

第一章　函館の夜明け　8

最初の外国人訪問者　8　船長ワシーリ・ミハイロビッチ・ゴロブニン　13　高田屋嘉兵衛　21

第二章　函館の開港　32

マシュー・ガルブレイス・ペリー提督　32　ユーフィミ・バスレビッチ・プチャーチン提督　46

第三章　最初の外国領事　52

ゴシケービッチとその一行　52　チャールズ・ペンバーテン・ホチソン　62　エリシャ・E・ライス　74

第四章　初期の宣教師たち　83

ロシア正教の宣教師　83　バシリ・マホフ　84　ニコライ　84　プロテスタントの伝道師　96　カトリック伝道師　108　オジエー－エマニュエル・メルメ・ド・カション　108

第五章　函館に住んでいた外国人——116
アーサー・ヘンリー・ティリー　116　カール・ヨハン・マキシモビッチ　123　トマス・ライト・ブラキストン　127　J・H・トンプソン　139　アレキサンダー・P・ポーター　140　ジョン・バクスター・ウィル　143　H・J・スノー　150　ゲルトネル兄弟　157　エドウィン・ダン　164
第六章　日本のジブラルタル、函館——168
ジブラルタルとの比較　168　背景　172　町の通り　179　家並み　182　店のたたずまい　185　旅館　186　食物　188　劇場　190　祭り　192　函館の遊郭と酒屋　197　中華街　201　七飯と駒ケ岳　207
第七章　町の人びと——217
奉行　218　通訳　223　庶民　227
第八章　函館のさまざまな出来事——232
アイヌ人骨発掘事件　232　函館戦争　235　ハーベル暗殺　254　明治天皇の行幸　261
おわりに　266　参考文献　271

外国人が見た十九世紀の函館

第一章　函館の夜明け

最初の外国人訪問者

一七九三年の八月六日、一隻のロシア船が函館港に停泊した。ラックスマン船長が率いるロシア皇帝を代表とするロシア使節団の一行である。知られているかぎりこれが函館を訪れた最初の外国人であった。ロシア人は一八一一年に再び訪れたが、このときには有名なゴロブニン（コローニン）船長をはじめとする一団が、函館で二年間捕らわれの身となっている。いずれにしてもこれらの外国人との接触は、日本の開国に影響を与えることになったのであった。

十六世紀ごろ、ロシア人はその手を東へ東へと着々と延ばしていた。一五五二年、イワン四世がカザンのタタール族を征服したことが、ロシアのシベリア征服の始まりだった。ロシア人は、一五八七年にはシベリアのトボルスクに到達し、一六四九年にはオホーツク海に至った。そしてその三年後にはカムチャッカ半島に最初の居留地を作り、日本に南下する基地としている。

しかしロシア人のシベリア征服は、決して簡単ではなかった。悪天候と先住民の抵抗、そして大陸を横断して運ぶ食糧の問題があった。シベリアの居留地は、厳冬期にはウラル山脈の西のロシアの要塞から食糧を調達しなければならず、陸路を使わなければならなかった。そのためロシア人は、極東の地に達するにおよんで、毛皮の交易が可能な中国や日本などに食糧供給地を探し求めたのである。

一七一〇年、ロシア皇帝は、コザック人ワシーリ・セバスチャーノフにカムチャッカから日本までの海路を

発見するように命じた。その探検は失敗に終わったが、後を継いだワシーリ・コレソフの探検隊は国後島まで南下した。彼らはそこで日本人と会い、千島列島が松前（蝦夷地本島）と連なっていることを知った。彼らはのちに松前への海路を発見したとして地図を皇帝に提出したが、その地図は伝聞に基づいて作ったもので、正確なものではなかった。また彼らは、首都ペテルブルグや他の町の役人に、千島アイヌが本州と海峡をへだてる蝦夷のアイヌと交易しているとも報告している。

一七三九年の五月には、デンマークの航海家ベーリングを隊長とする、ロシアの東シベリア探検隊の第二補佐官である、同じくデンマーク人のマルチン・シュパンベルグが、日本への航路探索の命を受けてカムチャッカ半島を出航し、一七三九年六月十八日に本州北部の沖に姿を見せた。そしてシュパンベルグは日本の役人から食糧の供給を受け、ついに日本への航路を発見したと確信し、急いでロシアに帰った。

一方、徳川幕府にとって、シュパンベルグの日本来訪は驚きだった。シュパンベルグが千島にやってきた情報はすでに江戸にも伝えられていたが、幕府がそんな遠隔地の事件について神経質になったのは、役人たちがロシア人に対してあまりにも無知であり、幕府自らも招かざる異人から日本を守るように天皇の命を受けていたからである。

また在日オランダ商人たちも、ロシア人について良いことはほとんど言わなかった。彼らは一六三九年以降、厳しい監視の下で長崎在住を許された唯一のヨーロッパ人だったが、日本貿易の独占がおびやかされるのを恐れ、競争相手のロシア人が日本に陰謀を抱いていると進言したことは明らかである。

幕府のもう一つの悩みは、ロシアの攻撃に対して蝦夷を守る松前藩の防衛力だった。一六七二年から松前藩は南樺太に漁業基地をいくつかおき、一七〇〇年には二十二人の日本人村ができていた。しかし、これらの基地は、ロシア人の攻撃を迎撃するには、あまりにも遠隔地でありすぎた。幕府には蝦夷を含む北方の島々の正